

極北の白鳥を探る

内 田 映

日本へ渡来の白鳥、主としてコハクチョウの繁殖地の実情を知りたいものだと思うこと久しかったが、やっと諸種の文献や観察記から分るようになって嬉しかった。

ここにそれらのことについて記述してみたい。

1) 東シベリア海チャウン湾の昭和62(1987)年夏の鳥相

チャウン湾付近は、コハクチョウの繁殖地であることは知っていた。

昭和62年7月に東海テレビが北極圏を越えて、極地シベリアのツンドラ取材の時に、東邦大学理学部生物学教室の長谷川博氏も同行して、シベリア東北部、東シベリア海に臨むチャウン湾内のコハクチョウの繁殖地を探られた。

この地帯は、日本へ冬期に渡来するコハクチョウのふる里として著名な地方であり、日本列島を通過するシギ、チドリ類の繁殖地でもある。

コハクチョウの繁殖地のツンドラ地帯に入って自ら調査を行った人は、私の知る限りでは日本人としては、初めての鳥類学者ではないだろうか。そして長谷川氏は、鳥鳥のアホウドリの調査を続けている研究者としても有名である。

昭和63(1988)年1月号の動物雑誌「アニマ」にこのコハクチョウのふる里の調査のこと、「極北シベリア探鳥記」で、写真入りで掲載されている。

この長谷川氏はモスクワで東海テレビの取材チームに合流した。7月10日にモスクワを発って目的地のチャウン湾口のペベク空港に向った。着いた空港は小雨で、気温は14℃で寒かった。7月24日まで滞在する。

空港からペベク市街にかけて観察された鳥として、キョクアジサシ、セグロカモメ、ミツユビカモメ、シロハラトウゾクカモメ、ユキホオジロ、ハクセキレイ、オジロトウネンがあげられている。

チャウン湾の奥の突き当りにチャウン・ステーションがあるので、ペベク空港から大型ヘリコプターでチャウン湾の東岸沿に、此所へ飛んでくる。海の所々に流氷が浮かんでいたり、表面は緑のツンドラを見たり、感慨深かったようだ。

緑の中に大小多くの池沼が見え、そこに白い点々が幾つも、あちこちに見えて来たのは、コハクチョウで、ヘリコプターの音に驚いて水面を蹴り、飛び立つのもいたり、あまり動かないのもいた。直下に100羽以上のコハクチョウを見て興奮もしている。

2) チャウン野外生物学研究施設

〒690 松江市国屋町 510

は、温水の流れる支流があることである。大きな川で温水が流入する所では開水面があり、よい水域で、例えばチョプチャ川（セミヤチン瀉周辺）やウゾン山カルデラの温水湖は冬中凍結しない。きびしい冬には温水の流入する水域は、ガンカモ類の越冬にとって数少ない好適な所である。

年によるオオハクチョウの数の大きな変化は、まずそれぞれの地区の気候や氷の状況、また局所的な移動による。冬がもっともきびしかったのは1978/79年で、1月にはセミヤチン瀉でもオオハクチョウがいなかった。

冬のオオハクチョウの死亡は普通多くはないが、ときどき大量に死亡することがある。例えば1970/71年の冬がそうで、セミヤチン瀉地域で川沿いに約30羽の死体があった。最近ときどきではあるが2～4羽の死体を記録した。食物で重要なのはリュウノヒゲモである。

繁殖ディスプレイは2月末から3月初めに見られた。この時期、とくに3月前半に春の渡りに先だって活発な移動が見られる。（訳：藤巻 裕蔵）

文 献

〔ソ連におけるハクチョウ類の生態と渡り，85～87（1987）〕

ルトウクチの集落も見え、更に10分程で、河のほとりにチャウン・ステーション（野外生物学研究施設）の建物が見えた。

ここまで湾口のペベクからヘリコプターで1時間弱、200 Km弱であった。

ルトウクチあたりに、3,000羽位コハクチョウがいると聞いた。チャウン湾は、東京湾の凡そ2倍の大きさで、湾の最奥部には大小の河川が流入している。

ソ連では北方生物問題研究所が組織され、ツンドラ生態系と、それに対する人間の影響が調査研究されている。そしてソ連の極北ツンドラ帯に14箇所に、こうした野外研究施設が置かれている。

チャウン・ステーションもその一箇所で、マガダン州立の施設で、研究者とその家族が合わせて16人が生活していた。多い時には30～40人が滞在する。このステーションでは、鳥類を研究している人は、一人も滞在していなかったという。

このステーションでは、終日、火力の自家発電機が運転され、各棟に電気が供給されている。発電機の冷却水の水蒸気はスチーム暖房に使われる。用水は近くの池から電気ポンプで階上のタンクへ汲み上げられ貯水される。蚊の襲来を除くと、ここでの生活は快適であったという。

3) コハクチョウのふる里

付近のツンドラに行くと、5羽、6羽のカナダヅルが見つかるが、これはベーリング海峡を越えて渡来したものである。

その他、池沼にアカエリヒレアシナギ、コハクチョウ、シロエリオオハム、上空にシロハラトウゾクカモメ、セグロカモメ、キョクアジサシが飛ぶ。

やがてコハクチョウの親子を見た時には感激したとのこと。ツメナガホオジロ、コオリガモ、ハマシギも見られ、ハクセキレイが建物の隙間に巣を造り雛を育てていた。

コハクチョウの巣卵と親子の写真撮影が最重要課題であったので、行ってみると、もう孵化した後で、卵殻だけが残っていたという。巣は周囲より少し高まった所にあり、地衣類、蘚苔類や枯草が集められ、マウンドになっていた。やっと探し求めた巣には、卵があることが確められた。

ユーラシア大陸には、3種の白鳥が繁殖している。最北のツンドラで繁殖するのが、コハクチョウで、その南の森林ツンドラからタイガの内陸湖沼ではオオハクチョウが繁殖する。ちなみに、それより大型のコブハクチョウは、もっと南の温帯の湿地で繁殖する。

日本に渡来するコハクチョウの一部は、ここチャウン湾のツンドラで繁殖することが、日本とソ連の共同調査によって明らかにされた。チャウン湾で首環標識された52羽の幼鳥のうち12羽が山階鳥類研究所や雁を保護する会、日本白鳥の会の人たちによって日本列島で観察されているからである。

長谷川博東邦大学理学部講師は、平成（1990）2年1月に「渡り鳥地球をゆく」を刊行（岩波書店）された。この中で、更にチャウン湾でのコハクチョウの繁殖行動を記述されている。

この地方にコハクチョウが飛来するのは、毎年5月16日から21日の間で、この頃はツンドラの沼や湖は、やっと表面の水が溶け始めたところで、水鳥の中では最も早い渡来であるという。帰来の際には、つがいや3～6羽の小群でおり、前年生まれと思われる若鳥を1～3羽連れている成鳥も居る。つがいは、やがて縄張りを確立し他のつがいを寄せつけず、連れて来た前年生まれの若鳥も追い出してしまふ。

6月上旬に産卵開始、早い巣では渡来から10～16日で産卵が始まり、約2日間隔で1卵ずつ産み続け、普通4・5卵で終わる。卵の大きさは直径で約10.5cm、重さは270g位という。つがいは交替で抱卵する。片方が抱卵の時は、もう一方は巣の近くで見張りをしている。30日目で孵化する。雛が飛べるようになるのは、8月の終り頃で、9月になると雪が降るので、その頃に日本へ向って渡り初めるといふ。

尚、昭和63年12月には「白鳥の旅・シベリアから日本へ・長谷川博著東京新聞出版局」も出版されていることを挙げておく。

4) ソ連文献からの白鳥

筆者は以前に、ソ連へ旅行される方に依頼してソ連本を2冊持っている。1冊は少し大型の「動物の生活・鳥類・第五巻、1970発行、教育出版社刊」と小型の「ソ連欧州地域における探鳥ガイドブック・初心者入門書、1960発行」である。前者は流石、動物の専門書であるので、鳥名にはロシア語とともに学名(ラテン名)が併記してあるので、種名は分るので有り難い。

英語版も2冊所持しており、1冊は「ソ連邦鳥類野外案内・1984」、他の1冊は、「チュコト半島及びウランゲル島の鳥類・第一巻、1982(1972)」である。

5) ソ連邦鳥類の野外案内(1984)のコハクチョウとオオハクチョウ

先ずソ連邦全般を記述してある野外案内から次に引用する。

コハクチョウは、全長110～120cmで全身白色、嘴の基部は黄色、黄色と黒色の縁は殆んど直角であり、幼鳥は嘴の先端が暗色で黒くはない。

低地の湿地のツンドラ帯に見出される。非繁殖期の間は、海や内陸の水面を好む。無数ではない。営巣地は湖や河川水路近くの草類や灌木のツンドラである。

巣は乾燥した突起した所や小丘に在り、度々その場所は湖又は小島の上に位置して、苔やスゲ類で作られ、むく毛や羽で裏付けされている。

6月の初旬から3～4卵を産むが、黄色味がかった卵である。離れた所から抱卵中の鳥のいる巣が見られる。その頃に雌鳥は、例えコハクチョウは渡りの間は非常に用心深いと言っても、人が近づくことを許す。

コハクチョウは、水上のオオハクチョウに似るが然しその首はオオハクチョウより短かいように見える。鳴声もオオハクチョウに似るが、然しコハクチョウの声は澄んでいて、いかめしくない。食物は水生植物を食べるが、度々陸上の草類も時々食べる。

ソ連邦での分布は、西のコラ半島のペコラ湾から東のチュコト半島までのツンドラ地帯である。

越冬地は西部ヨーロッパ及び部分的にイギリスで越冬する。東ではカムチャツカ半島、千島列島、日本、インドで越冬する。

オオハクチョウは、大きさが147～150cm、ハクチョウ類の中で最大のもので全身白色。黒い嘴の基部に於ける広い黄色の範囲は、尖った角度の形は嘴の外側の方に広がる。幼鳥は灰褐色で、黒い嘴は、成鳥が黄色であるところは桃色である。

オオハクチョウは森林ツンドラやタイガ(北方針葉樹の大密林)に生息し、渡りの間は海岸近くで記録される。無数ではない。スゲ類やヨシ類の繁茂した土堤があって、大きな湖の傍で営巣する。巣は苔、草又はヨシの堆積で、通常浅い水辺又は湖の隠れた島に造られる。4~6個を産卵し、大きな白色か又は黄色がかかった卵で、5月半ばから産卵が始まる。

非繁殖期の間は、小さい群れで過ごしている。水に頭や首を、さっとつけて採食するが、水には潜らない。泳いでいる間、首は通常上へ保っている。非常に用心深い鳥である。水から飛び立つ時は、走行出発の後、水から離れ、速く深い羽ばたきで、首は前へ伸ばしている。鳴声は声高く、ラッパのように鳴り響き、ガンーゴー、ガンーゴーと聞こえる。美しい音である。食物は水生植物や無脊椎動物である。

オオハクチョウは、自然界での著しい美そのものと言える。その数は減りつつあるので狩猟は禁止されている。

オオハクチョウは、ヨーロッパのソ連邦の北部地方、ツンドラ地帯を除く西部及び東部シベリアに分布している。隔離された集団繁殖地は、ロワー・ドゥナヤドニエー川、カスピ海の北部海浜が知られている。

ドゥバ、地中海、イラン、インド、南部中国の近傍の南で越冬する。ソ連邦では、黒海、カスピ海、バレンツ、オホーツク海で越冬する。

以上は「ソ連邦鳥類の野外案内(1984)」から記述したものである。尚「日本の白鳥」№13、昭和62年には、Kondratyev (1985)の「チュコト西部におけるコハクチョウの生態(藤巻裕蔵)」が掲載されている。

6) チュコト半島とウランゲル島の鳥類(1972)よりの白鳥

次に「チュコト半島とウランゲル島の鳥類・第一巻・1981(1972)」より、主にコハクチョウとオオハクチョウの記載を次に述べる。本書は1972年発行の露語の原書を1981年に英訳発行のものである。

東シベリア(極東)山地は、東北隅にはコリマ山脈、その続きのアナジル山脈が、チュコト半島の一部となっている。ウランゲル島は、半島の沖合の東シベリア海に浮かぶ。

本書では、オオハクチョウ、ナキハクチョウ、コハクチョウ、アメリカコハクチョウをハクチョウという1種とし、4亜種に分類してある。亜種というのは、個体間の差が独立の種類程大きくなく、地方的に相違する個体群を表す為に分類的に使われる語である。多くの種は、お互いに地理的に取って代る所の二つ又はもっと多い亜種から構成される。

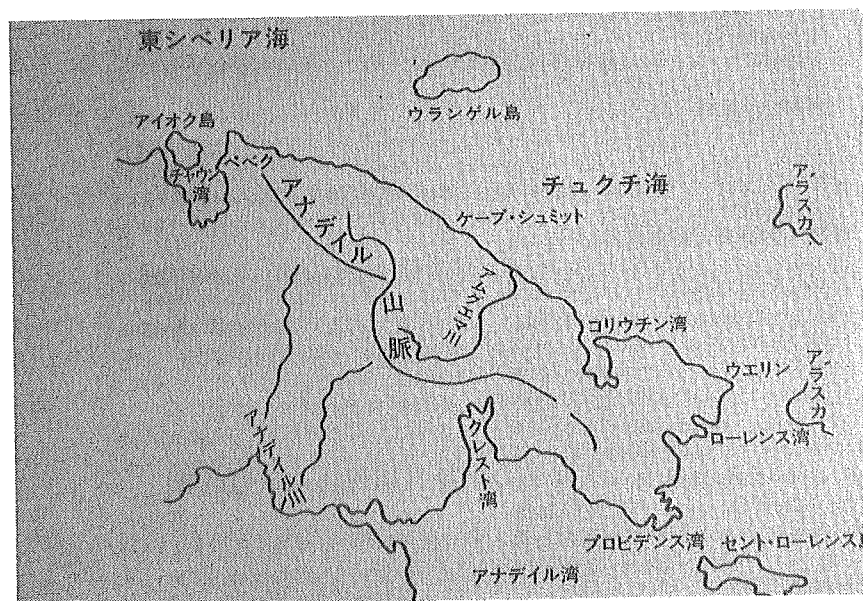
日本では、山階芳磨著世界鳥類和名辞典(昭和61年)によると、世界のハクチョウ属(*Cygnus*)は次の7種とされている。

コハクチョウ(ヨーロッパ、ソ連邦南部、中近東東部、モンゴル、中国西部。アフリカ北部、インド北西部へ冬に渡る。)、コクチョウ(オーストラリア、タスマニア)、クロエリハクチョウ(南アメリカ南部、フオー克蘭ド)、ナキハクチョウ(アラスカ、カナダの北アメリカ)、オオハクチョウ(北極圏、ヨーロッパ北部、中近東の北部、ソ連邦では北部及び東部からカムチャッカ、コマンダーまで、モンゴル北部。冬にはヨーロッパ、中近東、中国、朝鮮半島、日本へ渡る。)、コハクチョウ(北極圏、ソ連邦南部、中近東西部、中国西部及び東部、朝鮮半島、日本へ渡る。)、アメリカコハクチョウ(北ア

リカ北部。冬には北アメリカ南部海岸へ渡る。)

7) チュコト半島付近の古い白鳥記録

1899. 7. 13のハリマンのセントローレンス島探検は、最初のペアの記録, 1913. 6.28 のブルックスも同じく此の島で2組のペアの記録, 1922年夏のパイリイ島での巣の中にある千羽の雛, 1936年のガイストの報告の島での営巣観察, 1956. 5. 24 の島でのペアの確認, 1957. 8. 23 の5羽の幼鳥を伴うペアが島の海岸で観察, 1970. 6. 23 にレオノビッチはローレンス湾でペアを見た。



ベーリング海峡のシベリア海岸では、白鳥は前世記には稀であった。即ちネルソン(1883)は白鳥について確実な情報を集めることは出来なかった。シュミットもチュコト半島の東部には非常に稀であったと言った。

チュコト住民は、ウエリンには非常に稀であると語った。コリウチン湾の西方の岡の内陸には、白鳥は居るか居ないか或は非常に稀である。1956年にはアムグエマ川では、白鳥を見ることも声を聞くこともなかった。

メイデル(1894)は、アナジル山脈の南部斜面では白鳥がいなかったことが非常に目立つと報告している。ケープ・シュミット付近の内陸では、5月や6月に白鳥が見られたという報告があるが、一般的には稀である。アルゲントフ(1857)は、チャウン湾の白鳥のことに言及している。ここの住民が換羽した白鳥を捕えたという。1958年にレベデフやファイリンは、チャウン湾の西岸やアイオク島の南岸で、度々2羽又は3羽の白鳥を認めている。

シュミットやヤコブレフによると、本世紀の30年間の資料によると、白鳥はチャウン湾には無数であったし、更に白鳥はアイオク島及びずっと西のEast(極東)と呼ばれているツンドラには全く普通で

ある。

これらの古い報告書は、白鳥がコリマ川の下流に接続するツンドラでの比較的豊富である現在の概念と符合していると言える。

ウランゲル島では、白鳥は非常に稀であるという。白鳥や雁類の卵を収集するのに最も良い時期は、5月21日から31日（旧暦）であることを記している。

8) チュコト半島のオオハクチョウ・ナキハクチョウ・コハクチョウ・アメリカコハクチョウ

前述のように「チュコト半島及びウランゲル島の鳥類（1972）」の著者は、オオハクチョウ、ナキハクチョウ、コハクチョウ、アメリカコハクチョウを同じ種へ属する4亜種と考え、それらの間の差異は主に鳥の大きさ及び嘴の黄色の斑点の大きさであるとした。生態学的には、それらの白鳥は森林の鳥とツンドラの鳥へ分けられるとしている。

オオハクチョウがアナジル流域で営巣するチュコト半島の中央及び東部分に於ける白鳥の稀な渡来は、オオハクチョウが換羽する為に其所に來たということを一層事実とする。

コハクチョウは、稀にチュコト半島で出会うが、西部で繁殖する。

1861年の文献に、白いコハクチョウ、赤い頭のコハクチョウ、白い森林白鳥、赤い首を持つ森林白鳥という4種の白鳥を識別したという記録があるという。これは前者の2羽が現在のコハクチョウ、後者の2羽はオオハクチョウに該当すると思う。

レベドフ及びファイリンは、アイオク島及びチャウン湾に於けるコハクチョウの観察を記録している。チャウン湾の西方、400キロ、コリマ川流域の低地はコハクチョウの普通の営巣地域で、1916～7年の頃に、コリマの三角洲で雛を伴った雌も採集されているし、また3個の標本も採取されている。

アメリカコハクチョウは、アナジル地方に渡り鳥として、よく知られた白鳥である。チュコト半島の東部で折々営巣することは、非常にありそうであると述べている。またウランゲル島で認められた白鳥は、このアメリカコハクチョウであることは非常に可能性がある。ナキハクチョウも非常によく島へ度々来る。

アメリカの鳥類学者は、セント・ローレンス島で観察された鳥をアメリカコハクチョウと分類しているが疑問もあるという。